

塚田健一著 『エイサー物語——移動する人，伝播する芸能』

竹村 嘉 晃

エイサーは今日、日本国内で最も広く知られている民俗芸能の一つである。沖縄本島の青年たちの中で受け継がれている伝統的な「盆踊り」のエイサーは、地域社会における盆行事としての役割を維持しながらも、1950年代後半からは村落共同体の文脈を離れた競技会（全島エイサーまつり）や歓迎行事、各種イベントなどでも上演されるようになっていった。そこでは観客の前で演じるパフォーマンス性が強調され、より華やかで躍動的な芸能へと発展し、「創作エイサー」と呼ばれる新たな様式が生成した。

一方、1990年代から2000年代にかけてメディアを中心に一世を風靡した沖縄ブームによって、エイサーは本土にも広く紹介され浸透していった。その背景には、共同体を基盤としないクラブ・チーム型（琉球国祭り太鼓）の創作エイサーの発展と伝播、都市祝祭の隆盛、学校教育（運動会など）における創作エイサーの受容が深く関わっている。そしてエイサーは現在、地方の民俗芸能という枠を大きく超え、日本国内はもとより沖縄系移民が暮らす海外にまでグローバルに広がっているのである。

このような状況のなかで、本書は沖縄地方のエイサー文化全体を射程にいれつつ、八重山諸島石垣島の双葉エイサーと与那国島の久部良エイサーに焦点をあて、エイサー伝播の一つの事例を微視的視点から論じ、そこに介在している諸要素を丁寧に紐解きながら、伝播の背景と構造を明らかにしたものである。本書における著者の一貫した主張は、芸能が伝播する主要な要因として「人の移動」、著者の言葉をかりれば「芸のキャリア（運び手）」へ注目することの重要性である。またエイサーの伝播に対する問いとは、「エイサーと人間社会」との交点に在する問題であり、その交点にある社会的メカニズムがどのようなものであるか、それを明らかにすることが伝播研究の一つの課題であると述べている（6頁）。

本書は、学術的な体裁をとりながらも、「双葉エイサーは与那国島から伝わった」という言説から端を発した謎解きとしての様相を呈しており、八重山諸島に伝わるエイサーの伝播過程を調査・研究したプロセス自体がある種の「物語」を形成している点で興味深く、読者を魅了する。本書の章構成は、第1章 エイサーの伝播、第2章 エイサー研究を振り返る、第3章 エイサーを分析する、第4章 久部良からのエイサー伝播、第5章 双葉エイサーの復活とその背景、第6章「密貿易」とエイサー、第7章 久部良エイサーの「はたらき」をめぐって、第8章 エイサー伝播の社会的背景——人の移動と社会変動、である。以下、各章を簡単に概観しよう。

第1章では、石垣島石垣市街西部に位置する双葉集落に伝わるエイサーについて概観している。著者によるとエイサー伝播のパターンは、1) 伝授する側の青年会メンバーがやってきて指導する、2) 伝授される側の青年会メンバーが先方に学びに行く、3) 移住者個人が地元のエイサーを移住先の青年会に伝授する、4) 移

住者個人が移住先のエイサーをUターンした際に故郷に持ち帰る、のいずれかである。双葉エイサーは、与那国島の久部良集落から双葉地区に移住した男性が久部良のエイサーをもたらしたことに由来するため3に該当する。その芸能は、典型的な沖縄本島中部型の太鼓エイサーであり、速いテンポと躍動的な振付が特徴である。もともとは盆行事での活動が中心であったが、1990年代初頭より加わった女性メンバーの貢献によって創作エイサーの演目が増え、現在では様々な文化イベントでも演じられている。

第2章では、エイサーに関する先行研究を批判検討し、問題点を指摘している。これまでエイサーと沖縄・奄美の古謡集『おもしろうし』の関係が取りざたされてきたが、著者はその関係性を批判する最近の研究動向を紹介し、エイサーの成立や起源に関する定説は未だ存在しないとした上で、エイサーと念仏の歴史的な関係を強調する。また先行研究の分類法に基づいて、1) 沖縄本島中部を中心とした太鼓エイサー、2) 本島中部うるま市の与勝半島一帯に分布するパーランクーエイサー、3) 本島北部の本部半島全域に広がる男女の手踊りエイサー、4) 本島北部西岸の国頭村と大宜味村にのみ伝わる女エイサー、の4つに大別している。そして、本島北部本部町の瀬底エイサーに関する小林公江の研究を援用し、エイサーの伝播研究で重視すべきことは「地層」という観点であり、「地層」研究としての伝播研究という視点を提唱する。

第3章では、双葉エイサーと久部良エイサーとの相違について、編成・衣装・音楽・舞踊に関する構造分析を試みている。両者は共に標準的な伝承曲を演奏するが、双葉は太鼓と締太鼓による太鼓踊りのみという「簡素化された」形態であるのに対して、久部良は太鼓踊りに女性の手踊りとチョンダラーが加わる本島中部型太鼓エイサーに近い形態である。またYouTubeを使った動画検索・分析をもとに、双葉の演奏が一般的なテンポで多くの動きのパターンを含むのに対して、久部良は極端に遅いテンポで同一の動きのパターンを反覆する傾向が著しいと指摘する。

第4章では、インタビューや視覚資料の分析を通じて、双葉エイサーの由来伝承の事実性を検証し、徳田政治氏という人の移動に伴い、1960年代に与那国島の久部良集落のエイサーが石垣島の双葉地区にもたらされた事実を立証している。またエイサーが時代とともに大きく変貌する芸能である点を強調し、エイサーの理解には「どこの」という場所の視点だけでなく、「いつの」という時代の視点と認識が必要である、という小林幸男の主張に依拠し（109-110頁）、現在の久部良エイサーの芸能が、昔と比べて大きな変化がない、時代を超えた同一性を有する稀有な事例であることを指摘する。

第5章では、双葉エイサー発足時の様子と現在の芸能に大きな乖離がある点を検証している。双葉エイサーは1970年代後半から10年近く途絶し、1987年に青年会の再結成と共に再開している。その際には、本土に集

団就職した女性が移住先の愛知県で習得した豊田エイサーをUターン時に振り付けており、その豊田エイサーは沖縄市の登川エイサーの影響を受けたものであった。さらに、この第二次双葉エイサーも現在の芸態とは大きく異なるものであり、その要因として、1990年代後半から練習機会が増えていく過程で振付の細部が改良され、自然と変化していったことを聞き取りから明らかにしている。そして、エイサーの変化は「地層の堆積」(異なるエイサーの伝播)の問題として論じるだけでは不十分であり、「エイサーを主体的に実践する青年会の内発的变化と発展についても同様に考慮する必要がある」と主張する(121頁)。

第6章では、久部良エイサーを考察する上で重要な集落の成立と歴史について詳述している。大正初期のカツオ節製造工場の設立を契機として、久部良には糸満を中心に沖縄各地から漁民が集まり、カツオ漁とカツオ節製造の急速な発展に伴う形で集落が形成された。文献上の定説によると、久部良エイサーは、戦後まもなく消滅した桃原集落からの移住者によってもたらされたという。終戦直後の混乱期に「密貿易」中継基地として栄えた久部良には、桃原集落から農作物が供給されており、密貿易が衰退すると桃原集落からは人々が転出し、島内の他の集落や沖縄本島に散っていった。こうした背景のなかで、久部良に移住した人物によってエイサーが伝播したと述べている。

第7章では、久部良エイサーで用いられる採り物の「はたき」に注目し、芸能の系譜と進化について検証している。先行研究と動画サイトの分析から採り物の種類と分布地域を示し、扇と四つ竹はエイサー形態が成立した明治前半ばからまもなく導入されていると指摘する一方で、「はたき」と類似するぜいは琉球舞踊から転用されたものではなく、エイサー独自の内的発展によって案出されたものであると推察する(167頁)。そして、久部良エイサーが芸態上の同一性を保持してきた要因には、実践の「文化的権威」として機能する強力な「芸の伝承者」の存在があったことを強調し、それゆえにエイサーという芸能が本来持つ内的発展の可能性が抑制されてきたと論じる。

第8章では、久部良エイサーと双葉エイサーの伝播と系譜の流れを図示し、「人間とは潜在的に「芸のキャリア(運び手)」であり、「芸のキャリア」の移動によって芸能の伝播は達成される。しかも、この「芸のキャリア」の移動は、社会的・経済的変動に基礎づけられている」(180頁)と結論づける。また人の移動は社会的・政治的・経済的脈絡のなかで理解されなければならないと主張し、「芸のキャリア」となった個人の移動と本土移住に関わる社会的背景、すなわち戦後におけるアメリカの沖縄統治と米軍による土地接收、「密貿易」の盛衰、沖縄の移民史、若者の本土就職等を詳述し、人の移動は各時代の社会的動向や変化と不可分な関係にあり、むしろそうした社会的・経済的変動や社会環境の変化に誘発されていると指摘する(202-203頁)。

従来の芸能研究では、研究対象が国内であれ海外であれ、特定の地域に暮らす人々の間で伝承されている芸能実践の歴史や伝播、分類や芸態を論じたものが主流であった。著者も指摘するように、それらの研究では、暗黙のうちに特定の地域に「定住」している人々が歴史のなかで作られた文化的所産として芸能が理解され、考察されてきた(204頁)。これに対して、芸能の

伝播について論じる本書は、「定住」ではなくむしろ「人の移動」が芸能成立の要因になっていることを明示し、伝播に関わる「芸のキャリア」の实在を露わにするとともに、「共同体の文化的所産」として捉えられがちな民俗芸能における創造的な個人の存在と貢献を照射した点で高く評価されるべきである。

また著者は、長年従事してきたアフリカ音楽の研究に関する書籍のなかで、今日の音楽学研究における音楽分析離れを批判的に検討し、現在の潮流である音楽社会史的研究に従来の音楽分析的手法とアプローチを統合すべきであると主張している。本書はその具体的な方法論を提示した一つの事例研究ともいえるものである。舞踊や芸能に対する動作・芸態分析の方法論が明確に確立されないまま、あるいは批判的検証がなされないまま曖昧に葬られている舞踊研究の現状において、こうした著者の主張は舞踊研究自体の再考を促し、新たなパラダイムをもたらす契機ともなりうる重要な指摘である。

舞踊研究の世界的な動向に目をむけると、近年では、ディアスポラ研究と接合した移動・移民と舞踊・芸能に関する研究がかなり蓄積されている。しかしながら、それらの研究では移動を国から国という単一的な線で捉える傾向が強く、多国間を往来・環流する動きや同時多発的な複数の位相が浮かび上がってこない。こうした問題群に対して、芸能の伝播とは社会変化が招来する人の移動の「副産物」なのである、という著者の主張や地層的な観点を導入する手法は、新たな視点を切り開くうえで有益であろう。

反面、エイサーの現代的状況をふまえるならば、本書では伝承や教授法の変容、アクターの多様化(他村落や県外出身者)をめぐる複雑な位相が論じられていない。人の移動を社会的・政治的・経済的脈絡で理解すべきであるならば、エイサーの伝播の場において生起する人々の身体を含めた交渉の状況、接触と変容の過程に関する記述・分析が不可欠ではないだろうか。

近年、バレエやコンテンポラリー・ダンスなどの上演芸術とは異なる、国内の民俗芸能や世界の民族舞踊・芸能に関心をもつ大学院生が散見される。かれらの研究手法をみると、対象となる舞踊・芸能の実践やそれらを取り巻く現代的事象だけを追う傾向にあり、歴史性や通文化的な視点からの考察が不十分な印象をうける。本書は、文献資料の多様性や視野の広さ、言説を実証するための問題系の認識やデータの分析・提示法など、方法論に関する多くの示唆に富んでいる。本書はもとより著者の他の出版物も含めて、舞踊研究に携わる多くの大学院生に是非熟読してもらいたい。

(世界思想社、2019年3月刊行)

参考文献

- 沖縄市企画部平和文化振興課編、『エイサー 360度一歴史と現在』、沖縄全島エイサーまつり実行委員会、1998年。
塚田健一、『アフリカ音楽学の挑戦ー伝統と変容の音楽民族誌』、世界思想社、2014年。